

春幕下二段上。同年冬二段。同四年東廻二段。同五年七月幕上。同六年幕八枚目。同七年小結也。同八年冬關脇上。同九年冬於本所回向院大關相成。同十年春於芝神明改名。呼阿武松縁之助。同十一年春於本所回向院帶襪綱。厥後天保六年迄二十一年。相勤相撲數三百五十番。其内二百五十九番勝。五十一番負。引分無勝負四十一番也。

安政二乙卯歲十月建之

塾頭 武隈文右衛門

勇 嶋 磯 吉

小 柳 常 吉

千 賀 浦 庄 吉

小 野 原 萬 吉

催主 馬龍軒九郎右衛門

右の外行事木村庄之助以下數名、墓石に彫刻せり。此の建石は阿武松既に故人と成りたる後、最負の人々發起して爰に建てたりといへり。抑阿武松縁之助は、古今無雙の相撲にて、其の名を天下に顯し、後世に其の美名を残して、日の下開山と稱す。其の出生を尋ぬるに、能登國鳳至郡鷲川の

隣邑七海村の産なりとぞ。幼名を長吉と呼べり。幼年の頃より力量あるを以て、相撲取とならん事を欲し、文化十二年二十五歳にて武州江戸へ出で、武隈の門弟と成り、相撲名を小車と稱す。武隈その大食なるを見て、相撲の術に堪へじとて、路金一步を興へて歸國せしむ。故に既に歸路に就かんと板橋驛に一泊し、相撲人と成るも活計の爲めなり、今慮しく故郷に歸らば、衆人の嘲を免かれがたしと思慮し、宿主を介として更に鍛山の弟子と成り、名を小縁と改む。同年柁町の心法寺社内大相撲興行に初て序口と成り、名を小柳長吉と改稱す。夫れより年々の興行毎に段を進め、文政二年の春幕下二段に上り、同五年の春江戸藏前八幡の花相撲に、先師武隈と取組みけるに、二念なく勝を取らりたり。此の年の春幕の内前頭に進み、六年に幕八枚目に至り、同七年に小結と成り、翌八年の冬關脇に登り、九年の冬本所回向院に於て遂に大關と成り、翌十年の春芝神明に於て改稱し、阿武松縁之助と呼べり。凡相撲取初めしより、都鄙の諸興行毎に勝を取り、負けたりといふ事なし。故に古今未曾有の力者とし、世人日の下開山と稱美し、勇

名を天下に轟かせり。故に長門藩毛利家に抱えられ、腹米三十俵を賜ふといへども辭退せしにより、五十俵を賜ひたりと。相撲給金も三十三兩に至れりとぞ。故に江戸に本宅。妾宅を構へ、相撲年寄となり、一生裕福に暮し、嘉永四年十二月廿九日の朝私邸に歿せり。享年六十一歳、深川淨心寺の境内に墳墓を築き、爰に埋葬して碑石を建てたり。門弟若干人なる中にも、劔山・小柳の兩人は一二の高弟にて、其の名高しといへり。按ずるに、相撲は上古出雲の野見宿禰より濫觴して、勇名の相撲多しといへども、日下開山の美名を得たるは阿武松一人而已といへり。日下開山は天下無雙の稱也。武藝小傳に、宮本武藏自號日下開山と載せたり。

○長久山本性寺

法華宗也。貞享二年の由來書に云ふ。當寺開基、天正十四年三田村作内・橋本惣右衛門兩人、菩提寺建立仕度旨訴訟申上、則於枯木町屋敷拜領被仰付、越前國府中本興寺塔頭敷行院与申仰呼越、寺建立仕處、其後御用地に被召上、小立野に而替地申請移轉仕處、重而屋敷替被仰付、堅河原町

に而替地申請。然處又々屋敷替被仰付、元和元年於泉野寺屋敷被下、于今居住仕。とあり。按ずるに、枯木町は今枯木橋の邊なるべし。野田寺町妙法寺・卯辰妙應寺の由來書にも、枯木町に於て寺屋敷拜領すとありて、箕浦氏筆記に、蓮池の邊より枯木町と云ふ町邊まで云々といふ事を載せたり。又堅河原町は今云ふ堅町なり。さて開基檀那三田村作内は、慶長十七八年の土帳に、加州百五十石三田村作内とあり。河北郡津幡甚丞所藏古文書中に、作内の判書等あり。其の文左の如し。  
熊申入候。仍其方屋敷之儀、豫州へ申入候處に、御馳走被成、被申上可被下由候間、早々晚中に可被越候。自然隙入申候者、明朝必々待入申候。殿様へ御禮申可然存、細々申入候。恐々謹言。

極月廿八日

三田村作内印

津幡甚丞殿

津幡甚丞方へ被下屋敷之事

一、十五間四十二間者

六百二十歩

一、四間十六間者

以下略。